

底一致不可能なりと雖も約教の己顯の上の本迹二門に於て淺深を議せざる事前述の如きにして因果体用圓因圓果は偏に廢すべからずして遂に一妙法に歸して常に兩門雙美の妙法を顯し二理常に存し本迹俱に本有の妙法に歸入する事を知るべし授職灌頂鈔に示して曰く

『本迹の高下勝劣淺深は教相の所談也今ま其義を用ひず』

十法界鈔

縮遺二八六

本尊得意鈔

縮遺一三三〇

四菩薩造立鈔

縮遺一八五四

等の祖文を併せ拜せば『口傳抄』は觀心一致を明して一部讀誦の得意を示し『十法界抄』は四重與廢を明して在世轉入の教相を示して一致を明し『得意抄』は台家過時の法を破するの意を顯すとも吾祖所弘の法華は遂に一致なる事を明し『造立抄』は一代聖教三種教相を明して二門の淺深は時と機とに依る事を示して本迹の一致を顯す

如斯く本迹に約宗の上よりは永く勝劣を成し約

教の上よりは兩輪雙翼の如くにして一妙法を顯して一致を所成する者とす要を擧ぐれば本迹二門の高下勝劣は未開の前に在り二門の一致は顯本の己後に存在する事と知るべし

## 聖祖の御人格

猪 口 古 童

全世界の人に我が國の理想の最も偉大なることを、代表的に仰がせ、且つ、知らせるものは、我が國の中央から、亭々と無限の天空を貫き、萬嶽の上に表はれ而も泰然と聳るてゐる富士の神嶺であらう、仰げば彌々高く容易に近づくこと得難いやうである、しかし其の中には、清泉洋々と流れ、芳花馥郁と馨うばし、孤蝶も翩々として樹の下に舞ひ狂ひ、奇鳥も嚶々と深谷に朗歌するをぞ、誠に一笠の山とは云へ、泰山は斯様に所有風光を具へてゐる、往昔から偉人の風采も亦此の様なものではあるまいか、今私が芙蓉の雄姿を仰いで只管聖祖

の御人格も斯くと信じ、御遺文の一頁を拜讀して  
すら此の感が起るのである、建長五年開宗の朝か  
ら弘安五年示滅の夕まで、如何様な烈しい大獅子  
吼を爲し玉ふたであらうか、孤身を以て渺漫した  
權門の邪義を破折し、諸宗の高僧を呵責し、或は  
無間天魔と絶叫し、或は獅子身中の虫、國賊と罵  
倒し玉ひて彼の『七大寺の寺塔を燒拂ひて彼等の  
頸を由井が濱にて斬らずんば、日本國は必らず亡  
ぶべし』と極言し、殊に武威嚇々飛鳥をも落さん  
ばかりの勢ある北條氏をば小島の主と呼ははり、  
謀叛人と喝破す、其の公明正大なことは殆んど形  
容するに言葉なく、そうして、このやうな大罵倒、  
大苦諫は一人一家一郷の爲めでなく國の爲め、一  
切衆生の爲め、道の爲めに熾んに立正安國の大義  
を宣揚し玉ふたのである、其の意志の鞏固なこと  
は金鐵の如く其の絶叫は百獸の王のほゆるに似て  
容易に當り難い様であつた、しかし此の容易に當  
り難い御性格の存すると俱に、又温厚玉のやうな  
徳風を以て、人を温かに薰化されたのである、親

子師弟兄朋友其の誼、其の愛皆聖文に其の眞情、  
躍如として溢れてゐる『朝日東天に昇る時、日朗  
鎌倉にあるふと思ふふと日西山に没する時、日蓮  
伊東にあると知れ』と其の情緒綿々として盡きる  
ことはない、其の晩年身延の深谷に隱栖遊ばされ  
て、六十の老翁猶ほ父母を慕ふの餘り御庵室を距  
る五十丁の荆棘を排され峻坂を踏まれて山頂に攀  
ぢ登り故郷の空を遠望して追慕の泣を濺がれ給ひ  
し鷲峰神嶺の思親閣を拜する時今昔の感に堪る難  
いのである、嘗つて某閣主に、

多年の風雨五十年、嶮はしけれども孝の道云々  
と、歌はじめ、又聖祖自らも宣うやう、『今に生國  
へは至らねども、さすが戀しくて、吹く風、立つ  
雲までも東の方と申せば、庵を出でて、身にふれ  
庭に立ちて見るかり云々』と又彼の南條氏御書に  
『くりげの馬はあまりれもしろく覺る候、常の湯  
へひかせ候はんと思ひ候が若し人にもとられ候は  
む、又其の外痛はしく覺る候へば、湯より歸り候  
はん程、上總の藻原の殿の本にあづけ置きたてま

つるべく候に、知らぬ舍人をつけて候はば、覺束  
なく覺る候まかり歸り候はんまでと存知の爲めに  
申送』如何に其の溫情の周到であることに依つて  
偉人の半面の深いことをも知られ得てあろう、一度  
斯様を聖文を拜し奉らば、如何なる痴漢も、慄然  
襟を正しくしないわけには行かない、畢竟聖祖は  
理義に嚴正であると共に、情誼にも極めて濃厚で  
あつた、所謂柔情俠骨並び具はるとは、眞に聖祖  
の御性格を云ふのである、往昔から聖祖の御人格  
を評論する者が多いけれども、稍々もせば其の勇  
剛壯烈の方面ばかり見て、玉の如き濃厚の徳風を  
ば観ないで、單に排他主義者であるなどの論評を  
下すことばに淺浮も甚しい者である、斯等の妄論  
を吐く者は、其の折伏の真相及び聖祖の御素意の  
那邊にあるかを究めない者である、言はゞ一塊の  
沒常識漢である。

聖祖は靈山直授本化上行末法の大導師として、  
遠く釋尊の使命を齎らして、即ち東西兩文明の合  
致點である吾が國に應現せられ、熾んに別頭の教

化を振ひ玉ひし救世者であるから、先づ爾前諸教  
に誑惑された思想、即ち邪義謗法を斷じ破折して  
そうして濁世救護の第一事とせられたから、開宗  
以來廿余年大小の衆難も顧みずに、況滅度後の金  
言、勸持品孤起の妙偈を色讀せられた、聖祖の嚴  
烈な大折伏は偉大の慈悲を俟つて、初めて現はれ  
たのである、『日蓮は去る建長五年四月廿八日より  
今年弘安三年十二月に至る迄二十余年の間他事無  
し南無妙法蓮華經の五字を日本國の一切衆生の口  
に入れんと勵む計り也、此即ち母の赤子の口に乳  
を入れんと勵む慈悲也云々』、あゝげに是れ大慈悲  
の涙に充ち安慰と至愛とを具備した一大福音では  
ないか、吾々は乃ち此の涙に浴することが出來た  
時、其の人は其處に聖祖の御性格を知つたものだ  
自分は斯ふ斷言することに一分も憚らぬ。開目  
抄に言く『されば日蓮は法華經の智解は天台傳教  
には千萬分が一分も及ばずとも大難を忍び慈悲の  
すぐれたる事なそれをも、いだきぬべし』と、又  
報恩抄には『日蓮か慈悲曠大あらば南無妙法蓮華

經は萬年の外未來までもながるべし、日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ、此の功德は傳教天台にも超へ龍樹迦葉にもすぐれたり云々身輕法重死身弘法の大慈悲の菩薩とは、誰を云ふのであろうか、法然親鸞等の誑僧は比もつかず、天台傳教すら今の御聖文に依つて知れるであらう、獨り聖祖を除いては末法の導師と仰ぐものはない、直に聖祖は宗教家の本領である『以慈修身善人佛惠』を色讀された導師である、眞なる哉、師孝の日朗上人を造つたのも大信行の四條金吾を作つたのも、皆其の慈悲に感泣し、如何なる悲境に沈淪することも、決して身命を省みあかつたことは、自然の結果と云ふべきである、現時宗門の彼は如何に、眞摯に聖祖の慈悲に感泣するもの果して何程あるであらうか。

(をばり)



詞藻

初夏の小吼

太田純志

『我門家夜斷<sub>レ</sub>眠、晝止暇案<sub>レ</sub>之、一生空過萬歲勿<sub>レ</sub>悔』と嚴なる哉聖訓、尊い哉金言、豈に夫れ服膺せずして可からんや、

時今、榴花碧を燃し梅子正に熟せんとするに當り、北窓午睡に逸せんか、將、吾人の小吼を以て『蛙鳴青草泊蟬噪垂揚浦』とせんか、夫れ狗にして人衣を服するも誰かこれ人なりと云はん、猿にして人冠を頭にするも誰かこれ廟堂の人ありとやせん、現時衆俗圓頂と長袖を見て無用の長物と輕賤す、一理あらん、妙樂大師云へるあり

『像末清燒信心寡薄圓頓教法、溢藏盈函、不暫思惟、便至瞑目、徒生徒死、一何痛哉』と近時各